

## 愛による主体化 — シラーの劇作品をめぐる試論 —

菅 利 恵

はじめに

ハーバーマスは 18 世紀に文芸を中心とする市民的公共性が出現した過程を説明する中で、その担い手となったのが「小家族的に親密な人間関係の中で発見された主体性」<sup>1</sup> だったと述べている。市民知識層を中心に出現し、「情熱的に自己自身を主題化」するこの「独特な主体性」についてより詳しく知ろうとするならば、彼がその「文字通りの意味で」の「出身地」とした市民家族のみではなく、<sup>2</sup> 当時の人々に感傷的な情熱をかきたてた他の関係性にも目を向けるべきであろう。「自己自身を主題化する」主体性の誕生と強化という出来事は、そもそも感傷主義の時代風潮と深く関わっている。この時代、感情のさまざまな動きに熱いまなざしが注がれ、その細部が探られ認識されるまさにそのことによって、自分というものがより明確に意識化されたのだった。<sup>3</sup> 個々人が自らの感情を打ち明け合い認め合い、感情的な経験を増幅させて自己意識を育むためのゆりかごとなったのは家族のみではない。恋人や友人同士の親密な関係性もまた、文学作品や手紙や雑誌を通して新しい語彙や表現や理念を付与されながら存在感を強めた。さらに「親密な人間関係」を超え出たところにも、新しい情熱の受け皿は存在していた。18 世紀後半は、市民知識層が政治的空間への参加の可能性を模索する中で、社会全体の改善を希求する情熱に表現形式を与えることが試みられた時代でもある。当時パトリオティズムやコスモタニズム、またナショナリズムなどが未分化のまませめぎあっていたが、<sup>4</sup> そのせめぎあいは、高揚しはじ

<sup>1</sup> Habermas, Jürgen: *Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft: mit einem Vorwort zur Neuauflage 1990* Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1990, S.108. 本文中の引用は以下の邦訳による。ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換——市民社会の категорияについての研究』(細谷貞雄/山田正行 訳) 未来社 1994 年、64 頁。

<sup>2</sup> Ebd., S.112. (同上、70 頁。)

<sup>3</sup> Vgl. Wegmann, Nikolaus: *Diskurse der Empfindsamkeit. Zur Geschichte eines Gefühls in der Literatur des 18. Jahrhunderts*. Stuttgart (J. B. Metzler) 1988, S.86f.

<sup>4</sup> 当時の政治的言説についてはおもに以下を参照。Albrecht, Andrea: *Kosmopolitismus. Weltbürgerdiskurse in Literatur, Philosophie und Publizistik 1800* Berlin (Walter de Gruyter) 2005, S.82-192; Echternkamp, Jörg: *Der Aufstieg des deutschen Nationalismus (1770-1840)*. Frankfurt a. M. u. New York (Campus) 1998, S.42-162; Vierhaus, Rudolf: *Deutschland im 18. Jahrhundert. Politische Verfassung, soziales*

めた政治的な情熱にいったいどのようなかたちを与えるのか、という模索のあらわれとしてとらえることができる。そしてこの政治的な愛もまた、感傷主義の中で肥大化した自己意識と決して無関係ではない。その宛名であった「祖国」や「人類」は、親密な諸関係と同じように、個人の内面に新しい感情経験をうながす触媒となり、肥大化した感情エネルギーのはけ口となったのだ。<sup>5</sup>

重要なのは、こうしたいくつかの「触媒」や「受け皿」によってうながされ加速した感情経験と感情認識の拡大が、個々人のアイデンティティ形成にとって決定的な意味を持ったということである。ルーマンの『情熱としての愛』<sup>6</sup>では、近代市民社会において「愛」の社会文化的な重みが増した背景が次のように説明されている。近代化の中で政治や宗教また教育など異なる機能領域が分立しそれぞれ自己完結的に展開するようになると、個々人は互いに分裂した複数の領域に身をさすことになり、それによって従来彼らが「同一性をもった存在であることを支えてくれていた関係性」をも「偶然」と見なさねばならなくなった。そのために、「自らの有機体の存在を知るためには、何らかの名前を持つこと、年齢、性別、社会的地位職業といったありふれた社会的カテゴリーによって確定するだけではもはや十分では」なくなり、「そのことから、なお理解可能で熟知され、うちとけた親密な世界の必要性が生じた」<sup>7</sup>のだという。この「親密な世界」の意義は、たんに「うちとけた」雰囲気を提供して孤立した個人の不安を鎮めることにあったのではない。それはなによりも個々人にとって「社会的カテゴリー」に代わるアイデンティティの母体となったのであり、そのアイデンティティとはすなわち、この親密な世界でつむがれる感情的経験にうながされた「独特な主体性」それ自体にほかならない。つまり、アイデンティティの根拠として不十分になった「年齢、性別、社会的地位、職業」にかかわって、いくつかの「触媒」によって高められた個人的な感情の経験と認識こそが、自分が何者であるかを他に語るための究極の支えとなったのである。もっと言うならば、「私」について語る言葉は「私が何を感じるのか」を語る言葉と同一になった。そして「愛」に集約される個人的な情熱は、自らの立ち位置を自他に知らしめるために、必要不可欠な元手となったのである。

愛の情熱に、アイデンティティの糧という機能が託されること、これを、本稿では「愛の近代

---

*Gefüge, geistige Bewegungen*. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1987, S.96-109.

<sup>5</sup> 同様の機能を持った「愛」には、敬虔主義における「神への愛」も含まれている。しかし本稿では基本的に世俗的な「愛」に考察の対象を限定し、18世紀における「神への愛」、またそれらとシラー作品の関連についての詳しい考察は、今後の課題としたい。

<sup>6</sup> Luhmann, Niklas: *Liebe als Passion. Zur Codierung von Intimität*. Frankfurt a. M. 1982. 本稿の引用箇所は以下の邦訳による。ニクラス・ルーマン『情熱としての愛——親密さのコード化』(佐藤勉/村中知子 訳) 木鐸社 2005年。

<sup>7</sup> Ebd., S.17. (同上、15/16頁。)

化」と呼ぶ。そして本稿で試みたいのは、フリードリヒ・シラーによるいくつかの作品を、この「愛の近代化」の流れの中に置いて読み直すことである。

近代化とともにさまざまな愛のあり方が変容した過程をとらえようとするときに、シラーの劇作品はとりわけ興味深く思われる。なぜなら彼によりつむがれた劇世界では、くりかえし複数の愛の織りなすせめぎあいが展開しているからだ。たとえば『たくらみと恋』（1784）で、宰相の息子フェルディナンドと恋に落ちたルイーゼは、初恋の情熱と父親に対する愛情との板挟みになって苦しむ。また『ヴィルヘルム・テル』（1804）では、テルによる悪代官打倒という本筋の流れに、家族愛や同志愛、恋愛のエピソードが織り込まれ、それぞれの愛が互いに絡まりあいながら同時進行で展開してゆく。シラーほどに、さまざまな愛の対立や愛の孕む矛盾を追究した劇作家はいない。異なる愛がぶつかりあい、愛のために引き裂かれる個人を描いた彼の作品には、近代化とともに、複数の愛がそれぞれ「アイデンティティの糧」として影響力を強め人々を翻弄するさまが、そのまま映し出されているようにも思われる。以下の小論では、シラーの描いたいくつかの人物像における「愛」の機能を明らかにし、それを、彼の言説を通して愛の近代化の諸相に迫るための出発点としたい。考察の中で鍵となるのは以下の問いである。すなわち、愛の近代化において存在意義を増した「愛」とは、いったいどのようなものだったのか。この問いを探る過程では、シラーの言説の特徴を浮かび上がらせるために、彼とはまったく異なる「愛」のかたちを描いた同時代の劇作家として、J. M. R. レンツの言説にも光を当てることになる。

なおこれまでシラーの言説における「愛」の問題をめぐって注目されてきたのは、もっぱら初期の哲学的断片『ユリウスの神智学』を中心に読み取れるシラーの思弁的な愛の観念であり、またその精神史的な背景や個々の作品との関連であった。<sup>8</sup> しかしそのように哲学的な側面からシラーにおける愛の問題があつかわれる場合、新プラトン主義の高まりなど 18 世紀に固有の現象とシラーとの結びつきが抽出される一方で、19 世紀以降へと続く近代化との関わりは、見えにくくなってしまふ。本稿では、思弁的な愛の観念ではなく具体的な作品に読み取れる愛の機能に注目することによって、「愛の近代化」というもうひとつの精神史とシラーの言説との結びつきを示したい。それを通して、シラーの言説そのものも、新しい光で照らし出されるのではないかと考えている。

## 1. シラーにおける「新しい人間」たち

まずはシラー作品にしばしば見られるある特異な人間のタイプに注目することからはじめよ

---

<sup>8</sup> そうした研究の代表的なものとして: Schings, Hans-Jürgen: Philosophie der Liebe und Tragödie des Universalhasses – „Die Räuber“ im Kontext von Schillers Jugendphilosophie (I). In: *Jahrbuch des Wiener Goethe-Vereins* 84/84, 1980/81, S.71-95.

う。それは怖いもの知らずで大胆で、静かな確信とともに堂々と我が道をゆく人間たちである。

そのひとり目に挙げられるのは、『たくらみと恋』<sup>9</sup>の女主人公ルイーゼである。彼女はまだ十六歳、ものごし柔らかくつつましく、可憐で貞淑な恋人であると同時に、父親を心から愛する優しい娘でもある。そんな彼女に見「我が道をゆく」雰囲気はないようにも思われる。しかし、彼女はときにその優しげな外見に似つかわしくないほどの強さを見せている。たとえば恋人フェルディナンドの父である宰相が、息子を彼女から引き離そうと彼女の家にやってきた場面がそうだ。宰相は、市民の道徳的な世界に対置される頹廃した貴族世界を代表しており、酷薄で非人間的な悪人として登場する。反骨心あふれるルイーゼの父でさえ、彼の前に立つと「怒りのあまり歯軋りをし、かと思うと不安のあまり歯をかたかたならす」(795)といったありさまである。だがルイーゼは、宰相の投げつける侮辱的な言葉にもまったく動じず終始「品位を失わない。」(794)そして宰相に面と向かって、物怖じすることも悪びれることもなく、フェルディナンドとの愛を打ち明けるのである。そうした強靱な自意識は、彼女が恋のライバルであるミルフォード夫人と対決する場面でもいかに発揮されている。領主の愛人として宮廷に君臨するこの夫人は、はじめルイーゼを年端もいかない小娘と思って見くびっており、余裕たっぷりな様子で彼女を迎える。けれども彼女が婉然とほほえみ、からかうように「きっと私がこわいのね」というと、ルイーゼは「鷹揚に、きっぱりと」次のように答えるのだ。「私、世間の言うことなんぞなんとも思っておりませんわ。」(825)その後の対話の中で、心の平静を失い取り乱すのはむしろミルフォード夫人である。フェルディナンドへの恋を一步もゆずらないルイーゼの凜とした態度に、ミルフォード夫人は次第に自分をおさえきれなくなり、「いきなり立ち上」がり(829)、「真っ赤になり」(827)、「内心大きく動揺して歩き回る。」(827)そのようにミルフォード夫人が自制心を失うのとは対照的に、ルイーゼは終始「平然と気高く」(828)「毅然とした」(829)ままである。

もうひとり『ドン・カルロス』<sup>10</sup>(1787/1801)に登場するポーザ侯爵である。専制君主として君臨するフェリペ二世統治下のスペインで、彼は抑圧された民の解放に情熱を傾けている。彼は宮廷とは意識的に距離を取り、自ら表舞台に立つかわりに無二の親友である王子カルロスを導くことによってスペインの政治を変えたいと願っているのだが、その彼に、思いがけずフェリペ王と直接相対する機会がおとずれる。このとき、彼は驚き興奮しながらも、決して王の前で臆したり、動揺したりしない。王に対して「王者の僕にはなりかねる」(120)とはっきり宣言したうえ、よどもごまかしもなく自らの思想を熟っぽく語り、専制ではなく愛に基づく「人間的な」

<sup>9</sup> テキストは以下を使用。引用は括弧内に頁数のみを示す。Schiller, Friedrich: Kabale und Liebe. Ein bürgerliches Trauerspiel. In: *Sämtliche Werke*. Bd.I. Gedichte, Dramen 1. Hrsg. v. Albert Meier. München 2004, S.755-858.

<sup>10</sup> テキストは以下を使用。引用は括弧内に頁数のみを示す。Schiller, Friedrich: Don Karlos. Infant von Spanien. In: *Sämtliche Werke*. Bd.II, Dramen 2. Hrsg. v. Peter-André Alt. München 2004, S.7-27.

政治への要求をまっすぐに突きつけるのである。そんな彼のことを、王は「驚愕のおももちで見守る。」(120) ここでも、「立ち上がり数歩あるく」(122) など、内心の動揺を押さえがたく身体に反映させてしまうのは権力者の側だ。それに対してポーザは終始「臆することなく王の前に控え」(118)、その身体が動くのは、彼が王倒的な迫力で王に統治の改善を迫るときのみである。彼が静かな、しかし情熱のこもったまなざしを王に差し向けると、王はこれを「はね返そうとするが、たじろぎ狼狽して目を伏せる。」(124) 王はもはや完全に気圧されて、「これほどの人間ははじめてだ」(128) と感嘆するしかない。

さらにもうひとり、『ヴィルヘルム・テル』<sup>11</sup>の主人公テルも、その不動の自意識で権力者を動揺させる人間であろう。シュッテン川の荒れ果てた谷底で、「いかつい弓」(968) を担いだテルと一対一で出くわした代官は、以前テルを理不尽に罰したことを思い出して「血の気を失い、膝は震え、今にも断崖から落ち込まんばかり」(968) に取り乱す。しかしテルの方には当惑も気負いもまったく見られない。彼は代官の取り乱しぶりをあわれに思い、つとめて「懇慫に」(969) 代官に声をかけるのである。

ここに挙げた『たくらみと恋』のルイーゼと『ドン・カルロス』のポーザ、また『ヴィルヘルム・テル』のテルに特徴的なのは、彼らがみな、権力者の威王をものともしないような強い自意識を有しているということである。彼らは決して世間に背を向けた人間たちではないが、世の人々をからめとっている権力秩序を無条件に受け入れることはしない。「世間の言うことなぞなんとも思つて」いないと言っていたように、ルイーゼは、ものごとをあくまでも自分の体験からとらえようとする姿勢を持っている。またポーザも、王の呼び出しを受けたときにこう言う。「王が私に何を望もうとも、私の知ったことではない——私には私の立場で——王に対して、なすべきことがある。」(117) 暴君フェリペの世にあつて、ポーザは王の意向にとらわれずに自らの意思を保ち続けることができる「この世紀にたった一人の自由な男」(206) なのだ。テルもまた、厳しい自然の中で一人猟にふけり、家族以外の誰とも容易には群れようとせず、我が道をゆく「自由な人」(988) として描かれている。上に見た彼らと権力者との対峙の場面では、両者の精神的な力の差が、身体的な統制力の差として表現されていた。舞台の上で堂々と落ち着いた彼らの身体には、彼らの超然とした「私」のありようがそのまま明らかめかきされているように見える。端的に言って彼らは、他からの浸食を容易にはゆるさない確かな自己を有しているのである。

「私が危険にみえますのは、私が自分というものについて考えを持っているからでございます。」(121) ポーザがこう言っているように、超然とした「私」とは、一方で、危険な存在であろう。なぜなら、世間に流通するヒエラルキー秩序を軽やかに超越したその生は、この秩序の上

<sup>11</sup> テキストは以下を使用。引用は括弧内に頁数のみを示す。Schiller, Friedrich: Wilhelm Tell. Schauspiel. In: *Sämtliche Werke*. Bd. II, Dramen 2. Hrsg. v. Peter-André Alt. München 2004, S.913-1029.

に立つ者に、自らの権力の虚構性を否応なくつきつけることになるのだから。事実ポーザは、「王者の僕にはなりかねる」と高らかに宣言することによって、王権から「神秘のヴェールを取り去ってしまった。」(121) またヴィルヘルム・テルも、その「慇懃な態度」によって代官の権威の足場を掘り崩し、まさにそのために、代官の深い恨みをかうことになる。

その一方で、「自由な」者たちとは、今ある秩序関係を超越して「今」の一步先をゆく「新しい人間」でもある。ポーザは言う。「この世紀は、私の理想にとってはまだまだ未熟でございます。私は、来るべき時代の市民として生きているのです。」(121) このように彼が生きる現在は、彼にとってはすでに乗り越えられるべき「過去」に属している。フェリペ王がポーザについて「これほどの人間はおはじめてだ」と感嘆したように、未来を先取りする「新しい人間」たちは、現在とは異なる理想化された未来を予感させるがゆえに、危険視のみではなく尊敬やあこがれの対象ともなる。ヴィルヘルム・テルもまた、近隣にすむ人々から信頼を集め、誰もが「あんな男はこの山地の方に二人といない」(922)とみとめていた。シラーは、そうした「新しい人間」の放つたくいまれな魅力が、他人の生き方にじわじわと影響を及ぼしてゆくさまを繰り返して描いている。『ドン・カルロス』のフェリペ王にとって、ポーザとの出会いは「新しくより美しい朝」(347)であった。彼との会見を経て、王は自ら顕著に変化しはじめる。すなわち、周囲がいぶかしがるのをよそに、従来の側近を遠ざけて、ポーザを腹心にしようとするのである。『たくらみと恋』のミルフォード夫人も、ルイーゼとの対決の後に、新しい道を歩みはじめる。すなわち、真摯に恋するルイーゼの姿に圧倒されて自分のあり方を見つめ直して、今ある地位もフェルディナンドへの恋もすべてあきらめ、宮廷を立ち去ってゆくのだ。

それでは、このように特別な影響力を持つ「新しい人間」たちを支えているのはいったいなんなのだろうか。この問いにとって決定的な意味を持つと思われるのが、彼らのうちに息づいている「愛」である。

ルイーゼに強力な自意識を吹き込んだのは、フェルディナンドとの愛にほかならない。彼女は彼との出会いを次のように語っている。

あの方に初めてお目にかかったとき——(次第に早口になって)そして急に血がほおにのぼって、からだ中血が湧き巡り、わきたつ血も吐く息も「この方だ」とささやいたとき、そして私の心が、これこそ長いあいだ待ちこがれていた方だと知って、「この方だ」と証言してくれたとき、そしていっしょになって喜んでくれる世界じゅうに、その言葉がこだましたとき。あのとき、おお、あのとき初めて私の心に朝日がのぼったんだわ。(764)

ここに見て取れるように、ルイーゼの恋の目覚めは同時に彼女の心の「朝」であり、新しい「私」の目覚めでもあった。『ドン・カルロス』のポーザの場合、その自我の中心にあるのは「新しい国家の大胆な夢」(173)であり、人間的な政治を希求するという彼の政治的信念である。けれどもこれはただ公平性を要請する知的な信念ではなく、あくまでも感情的な経験として認識されている。「彼の美しい生涯は愛そのものでした」(195)とカルロスも述べているように、ポーザは理知ではなく愛の人であり、彼にとって、政治は理知よりも愛の領域の事柄なのである。彼は「人類を愛して」(120)おり、その政治的信念は、人類への燃えるような愛の情熱それ自体にほかならない。そしてあとでみるように、この普遍的、政治的な愛は、絶えず個人的な愛の領域と結び付けてとらえられている。ヴィルヘルム・テルの場合、家族に対して注がれるあたたかな愛が、彼という人間の主軸をなしている。この愛こそが彼のすべての行為の基盤となっており、代官に立ち向かうという政治的な行為をうながしたのも、決して政治的な計算ではなかった。キュスナハト近くのはざま道で代官を迎え撃とうと待ち受けているとき、テルの頭を占めているのは、これから自分が行おうであろう人殺しの行為のみではなく、愛する自分の子どもたちのことなのである。「かわいい坊やたち、今という今も、お前たちのことばかり考えている。」(1005)

このように、シラーの描いた「新しい人間」たちは、恋愛にしる人類愛にしる、家族愛にしる、近代化の過程で市民知識層の心の糧となった何らかの「愛」によってこそ、その力の源泉を得ている。そうした愛に背く行為は、彼らにとってもはや自らの生をそのまま否定するに等しく、彼らの中で、自分であることとはその心のうちの情熱に正直であることと同義である。つまり彼らの超越的な「私」の内実は、彼らの愛の情熱そのものにほかならない。彼らは、愛という個人的な情熱の経験を通してかけがえのない「私だけの感情」に目覚めており、その感情がそのまま彼らに、時の権力をも圧倒する強固なアイデンティティを与えている。端的に言って彼らは、愛によって「私」の意識に覚醒し、愛によって主体化した人間たちである。つまりシラーの作品における「新しい人間」たちの姿には、「アイデンティティの糧」という近代的な愛の機能が、そのまま明らかにされているのだ。

## 2. レンツ：愛による主体化の挫折

しかしそれにしても、「新しい人間」たちのしなやかな強さは、特異であるようにも思われる。彼らの支えが「愛」なのだと、ではこの「愛」とはいったいどのようなものなのか。そもそも愛とはなんなのだろう。ひとまずそれを、ある対象へのやむにやまれぬ情熱とゆるやかに解しておくことにして、ではそのような切実な感情を経験し追求すれば、誰でもシラーの「新しい人間」たちのように、他に対してよどみなく自己を主張することができるようになるのか。濃密な感情を経験しこれを認識することが、なんらかのかたちで「私」の意識を覚醒させて「独特の主

体性」をうながすのだとしても、そうして目覚めた自意識は、いつもルイーゼたちのそれのように超然とした強さをまとっているものだろうか。

この問いを考察するために、以下では少しシラーから離れて、劇作家 J. M. R. レンツの作品に目を向けることにしたい。レンツが集中的に活躍したのは 1770 年代であり、シラーが劇作家としてデビューする 10 年ほど前のことである。1781 年に『群盗』が人々の話題をさらったとき、レンツはすでにドイツの文壇から姿を消していた。1792 年に孤独な死を迎えるまで彼はモスクワで生き続けるのだが、ゲーテはもちろんヘルダーやヴィーラントとも交友関係を失っており、ドイツ語圏にあつてはすでに過去の人であった。1797 年、文芸雑誌の編集者として掲載用の作品を探していたシラーは、ゲーテの手元にレンツの原稿が残されていないかどうかを問い合わせ、未発表の原稿を譲り受けている。翌年『森の隠者』などを自らの雑誌に載せていることから、シラーはレンツの作品に一定の魅力を認めていたと思われるが、ゲーテへの遠慮もあつてか作家として積極的に評価することはなく、直接的に影響を受けることもなかった。<sup>12</sup> そのように二人の具体的な接点は少なかったのだが、それでも、ほぼ同じ時代を生きた二人の言説には、似通った問題意識が確かに込められている。本稿の主題にかんしても、二人の作品は、愛の近代化という時代の流れをいち早く取り込み、問題化している点で共通している。ただその取り込み方がまさに対照的なのであり、愛をめぐる両者の言説を比較することで、シラーにおける愛の特異性を浮かび上がらせることができるように思われる。

ここではレンツの出世作であつた『家庭教師』<sup>13</sup>を通して、彼の描いた恋愛の特徴を探ることにしよう。この作品の主人公ロイファーは、筋の展開の中で二回恋に落ちている。まず一度目が、少佐の住み込みの家庭教師として働いていたときの恋で、その相手は雇い主の娘であり教子でもあつたグストヒェンである。この一度目の恋で注目に値するのは、それがきわめて曖昧なものとして描かれているということである。グストヒェンにとって、ロイファーは彼女の本来の恋人フリッツの身代わりにすぎないし、ロイファーのグストヒェンに対する気持ちもまたあやふやだ。彼は少佐の家を出て自分の実家へ来るようグストヒェンを誘いもするが、彼女に断られると、それ以上説得しようとはしない。「あなたは私のことを愛してくれたと思っていた」とグストヒェンに言われても、「考えさせてくれ…」と、「物思いに沈んだまま座っている。」(68) そんな不確かな恋愛は、主人公の自己主張のよりどころにも、その統一的な自己像の支えにもなりえ

<sup>12</sup> Vgl. Kaufmann, Ulrich: „Ich gehe aufs Land, weil ich bei Euch nichts tun kann.“ – zu einigen Aspekten des Aufenthaltes von J. M. R. Lenz in Weimarer Musenhof. In: „Unaufhörlich Lenz gelesen...“ Studien zu Leben und Werk von J. M. R. Lenz. Hrsg. v. Inge Stephan und Hans-Gerd Winter. Stuttgart/Weimar 1994, S.153-166, hier S.157f.

<sup>13</sup> Lenz, Jakob Michael Reinhold: Der Hofmeister oder Vorteile der Privaterziehung. Eine Komödie. In: Werke und Briefe in drei Bänden. Bd.I. Hrsg. v. Sigrid Damm. Leipzig/ Frankfurt a. M. 1987, S.41-124.



ない。グストヒエンとの恋愛は、彼に説得力ある自己像を与える契機としてではなく、逆に、彼という人間の輪郭を、彼にとっても他人にとっても、ぼやけた、曖昧なものへと解体してしまうものとして描き出されている。

ではロイファーがもっと真剣に愛すれば、彼も説得力のある主体性を獲得できるのだろうか。重要なのは、どんな逆境にあっても思いを貫き情熱をまっとうすることなのだろうか。けれども彼の二度目の恋は、事情がそれほど簡単ではないことを物語っている。グストヒエンが身ごもったために、少佐の館を逃げ出したロイファーは、村の教師ヴェンツェスラウスの家に転がり込んで住み込みの助手となる。グストヒエンとの情事の反省から、彼は去勢までするのだが、しかしあるとき村娘リゼと出会うと、今度は一目で彼女に恋をして、唐突に結婚を決意する。この二度目の恋は、ロイファーにとっては真剣そのものだ。リゼにキスしたところをヴェンツェスラウスに見とがめられた時、彼はこう言い切っている。「たとえ僕の心臓がもぎ取られ、手足を切り落とされ、血の通った血管が最後の一本になっても、この裏切り者の血管は、やはりリゼを求めて脈打つでしょう。」(115f)けれども、ここまで強くその固有性と真実性が主張されているにもかかわらず、この二度目の恋もまた、他にに対する説得力は弱い。ロイファーとのやりとりから見えてくるリゼは、将校たちの派手な服装にまどわされ、知的な男性だというだけでロイファーとの結婚に簡単に承諾するような、考えの足りない少女である。ロイファーの去勢について正確に分かっているかどうかも怪しい。一度目の恋の相手グストヒエンもまた、貞操観念の薄い、当時の劇作品にあつては特異な女性像であつたが、それでも彼女は、優しさと情熱を併せ持ち、ルーイーゼがそうであつたような、市民悲劇に特有の感傷的な恋人のイメージとまだしも重なり合っている。それに対して、愚かな少女としてばかり強調されているリゼは、教養ある市民男性の恋愛相手に全くそぐわない。言いかえれば「リゼ」は、当時の社会において、市民的な欲望の対象としての説得力を持たないのである。そんなリゼに対するロイファーの思いは、去勢した彼が今さら結婚する、という成り行きの不自然さを埋め合わせる代わりに、彼という人間を、市民的な価値意識から逸脱した変人に見せるばかりである。つまりいかにリゼとの愛が、ロイファーにとって「自分だけの」心の真実であっても、それは決して彼の存在を正当化してはくれないのだ。

この『家庭教師』をはじめとして、レンツは繰り返し、「説得力を持たない恋愛」を描いている。『イギリス人』<sup>14</sup> (1777) のロバートも『森の隠者』<sup>15</sup> (1776) のヘアツも、『哲学者は友達によって作られる』<sup>16</sup> (1776) のシュトレフオンも、それぞれに切実な恋をし、その恋は、彼らに

<sup>14</sup> Lenz, Jakob Michael Reinhold: Der Engländer. Eine dramatische Phantasei. In: *Werke und Briefe*. Bd.I. 1987, S.317-338.

<sup>15</sup> Lenz, Jakob Michael Reinhold: Der Waldbruder, ein Pendant zu Werthers Leiden. In: *Werke und Briefe*. Bd.II. 1987, S.380-412.

<sup>16</sup> Lenz, Jakob Michael Reinhold: Die Freunde machen den Philosophen. Eine Komödie. In: *Werke und*

他のことを見えなくさせるほどに激しい。けれども彼らはみな、どれほど愛しても明確な自己の輪郭を身につけないままに終わる。愛によって周囲によみなく自己表現、自己主張しうような堅固なアイデンティティを得るかわりに、愛すれば愛するほど、かえって自らの存在が場違いなものであることをさらけだしてゆくのである。シラーによる「新しい人間」たちの毅然としたありようとは対照的に、レントツにおける恋する主人公たちはしばしばよるめき、飛び上がり、膝をがくがくさせながらおぼつかない足取りでさまよう。その落ち着きのない姿は、彼らのアイデンティティの不確かさをまさにそのまま物語っているだろう。愛により主体化する人間たちを登場させたシラーに対して、レントツは、愛による主体化につまづく者たちこそを繰り返し描き出している。<sup>17</sup>

### 3. シラー：主体を支える愛の条件

さて、「新しい人間」たちの愛をめぐる問いに戻ろう。上に見たレントツの言説が、愛に身を捧げることでそれ自体に必ずしもアイデンティティを支える力がないことを示唆しているとするならば、シラーにおいては愛そのものが特別な意味を持っているのだろうか。

もう少しシラーにおける恋愛の特徴を見てみたい。くりかえし述べてきたように、シラーが描いた「新しい人間」たちは、世間に流通する価値意識からあえて逸脱することを辞さない人間であった。そのために、彼らはしばしば世間から孤立してゆく。けれどもその孤立の仕方は、ロイファーが、リゼへの愛を主張すればするだけ文化社会とのつながりを失っていったのとは明らかに異なっている。レントツの描いた人物とは違って、彼らは、その情熱をつらぬこうとするなかで、ただ周囲とのつながりを失うばかりでは決してないのである。ルイーゼの恋は、彼女にとって「私だけ」の、だからこそ貴重な感情であった。だが見落としてならないのは、この「私だけの」感情が同時に、個人としての「私」をより大きな全体性へとつなげてゆく契機ともなっていることである。先に引いた「恋の目覚め」のせりふの中で、ルイーゼは愛の経験において自分の気持ちが「世界にこだまし」、世界が「いっしょになってよるこんでくれる」という感覚を表現していた。ルイーゼは、自分が恋に落ちた「そのときほどに世界が美しく見えたことはなかった」(765)と言う。つまり彼女の恋は、彼女に「世界」との新しい関係性を開く扉ともなっているのである。

もちろんルイーゼの場合、恋によって開かれた新しい「世界」は、彼女の恋の喜びをそのまま「こだませ」たものでもあり、広がりを持たず自己完結したものにはすぎないともいえる。それ

---

*Briefe*, Bd.I, 1987, S.274-316.

<sup>17</sup> おそらくこの点にこそ、愛の近代化の過程におけるレントツの存在意義があった。これについて詳しくは以下の拙稿を参照。「愛の近代化をめぐる寓話——J. M. R. レントツの『哲学者は友達によって作られる』について」：希土同人社『希土』第34号（2009年）、112~133頁所収、128~131頁。

に対してポーザやテルにおいては、以下に見るように、個人的な愛と「世界」とのつながりがより具体的なかたちで意識されている。

ポーザの愛は、もともと「人類」に向けられたものであり、はじめから、個人を超えた全体性に直接結びつく情熱であった。特徴的なのは、彼がこの全体的なものに捧げる情熱をより個人的な愛、つまり親密な関係にある個人に向けられた愛とも、つねに連動するものとしてとらえていることである。彼にとって王子カルロスへの個人的な愛が、人類全体に対する自らの愛を高めるための触媒にほかならなかったことは、次のようなせりふに明らかである。「私は幸運にめぐまれて、ひとりの王子を友とすることができました。このひとりの友にささげました私の心は、全世界を抱擁いたしました——カルロス様のお心の中に、私は幾百万のための楽園を建設いたしました。」(172) このように、個人的な愛の中に「幾百万のための楽園」の萌芽を見て取っているからこそ、ポーザは、王の妃に対するカルロスの不幸な情熱をも、否定しようとしなかった。継母である王妃への、カルロスの激しく絶望的な恋慕について、彼は言う。「人々が死を見たところに、私は生を見たのです。——この希望のない炎の中に、希望の金色の光をみとめたのです。そして、その光をすばらしいものにまで、最高の美にまで高めようと思ったのです。」(174) このせりふが発せられる場面で、ポーザはフェリペ王を裏切り自らの死をすでに覚悟している。悲壮な覚悟を胸に秘めながら、彼は王妃に対して、遺言のつもりで次のように念を押す。「どうぞ、永久にカルロス殿下をお愛しくくださいますよう、人をはばかったり、あやまった犠牲心にまどわされたりしてこの愛を否定するようなことは決してなさいませんよう、変わることなく、末永くお愛しくくださいますよう。」(175) 彼がこのように頼むのは、「最高の美」たる王妃との愛があるかぎり、友カルロスの人類愛への道は閉ざされなはずだと思っているからである。彼は、カルロスが王妃への愛を心の糧にして、自らの死後も「この王国に新しい朝をもたらす」(173) ために歩み続けてくれると信じているのだ。

しかしここで注意せねばならないのは、そうした個人的な愛と理想化された全体性をつなぐ回路が、この劇世界の中ではただポーザの信念のうちにのみ存在している、ということである。身近な他人を心から愛することが、そのまま個人を全体的なものに結びつけるという考えは、他の登場人物たちに、信念としても実感としても共有されていない。王妃とカルロスにとって、二人の愛はもっぱら個人の内面のうちに閉ざされた情熱であり、彼らをただ孤立させるばかりで、理想的な全体性からむしろ遠ざけるものである。だから王妃は、カルロスが自分への恋情に苦しんでいることを知ったとき、彼をこうさとした。「私のために浪費しておられる愛は、やがてお治めになる国にこそ注がれるべきものです。(…)初恋はエリザベトでしたが、二度目の恋人はスペインでありますように。」(35) またカルロス自身も、心のすべてを王妃に傾けたために、人類に寄与するための情熱を、もはや枯渇させてしまったと感じている。彼はポーザに対してこう言

う。「おれはあのおそろしい恋に、おれの精神の早咲きの花を、あとかたもなくむしりとられてしまった。もう君の大望にとっておれは役立たずになってしまった。」(184) ポーザの死とともに、個人と普遍的全体を仲介するものとしての愛の観念は、この劇世界の中で完全に見失われてしまう。友の死を経験したカルロスが、普遍的な人間愛の実現のために生きることを決意するのだが、それと同時に、まるで夢から覚めたように王妃への愛を卒業するのである。「私は長く苦しい夢を見ておりました、私は愛していました——今ようやく目覚めたのです。」(216) 「ようやく私は、あなたをわがものとするよりもっと高貴で望ましい仕事があるとわかったのです。」(217)

こうして『ドン・カルロス』においては個人的な愛と全体的なものとのつながりが両義的なままとどまっているのに対して、『ヴィルヘルム・テル』では、劇世界そのものがこのつながりをことさらに浮かび上がらせるようなかたちで作られている。先に見たようにこの作品では、テルによる代官打倒の行為が、純粋に家族への愛からうながされたものとして強調されていた。テルはまさに「私的な動機から祖国救済者になった人間」<sup>18</sup>なのであり、ここでは家族愛がそのまま、祖国救済という全体性への愛の行為に帰結しているのだ。そもそもテルの「愛」は、それが「家族愛」であるという時点で、すでに全体的なものへの確かな道筋を有しているともいえる。なぜなら 18 世紀において家族愛は、最も道徳的な愛として、市民的な自己主張の要である「人間的なもの」の具体像と見なされていたのだから。<sup>19</sup> 市民的な価値意識において、家族愛は個人的な愛でありながら同時に「人間的な」道徳の証という機能を持たされており、その意味で、あらかじめ普遍的、全体的なものとして直接結びつけられていたのである。そしてテルは、このように家族愛を普遍的道徳性とそのまま重ね合わせるという市民的な思考様式に、非常に忠実な人物として描かれている。冒頭の場面で、彼は代官に追われている人を逃がすために、嵐の中湖にこぎだす。なんとか無事に湖をわたりきることができたのだが、家で待っていた妻は、家族を置いてもしも命を落としたらどうするのだと、テルをとがめる。「奇跡だわ、助かったのが。いったいあなたは女房や子供のことを考えてくれなかったのですか。」(967) それに対してテルはこう返す。「お前、おれはお前たちのことを考えたんだよ。だからこそあの男の子供たちのために彼を助けてやったんだ。」(967) つまりテルにとって、家族愛と人間的な愛の領域は区別しがたいかたちで浸透し合っているものであり、そのようなテルのあり方を通して、ここでは家族愛が、普遍的道徳的な人類愛と境界線を持たない、もともと「全体性」とそのまま結びついたものとして強調されて

---

<sup>18</sup> Alt, Peter-André: Auf den Schultern der Aufklärung. Überlegungen zu Schillers „nationalem“ Kulturprogramm. In: *Prägnanter Moment. Studien zur deutschen Literatur der Aufklärung und Klassik. Festschrift für Hans-Jürgen Schings*. Würzburg 2002, S.231.

<sup>19</sup> Vgl. Habermas 1990, S.107-115.

いる。

上に見てきたようにレイゼやテルやポーザの愛は、「人類」や「世界」や「祖国」や「道徳」など、なんらかのかたちでの「全体性」とつながろうとする志向を持っている。『ドン・カルロス』に明らかだったように、このつながりはシラーにおいて、決して常になめらかに現実化されるものではない。むしろつながろうとしているのに、またはつながるはずであるのに生じてしまう裂け目こそが、彼の作品世界に緊張感をもたらす源となっている。だが重要なのは、両者が少なくとも「つながりうるもの」として示唆されているということなのだ。すなわちシラーにおける愛は、その登場人物たちに対して、ただ彼ら自身の固有の感情を自覚させるだけではなく、彼らが「全体的なもの」へとつながりうるという可能性をかいま見せる。そしてこの、ほのかに認められるつながりの可能性こそが、レンツにはなくシラーに特徴的なものであり、彼の描いた「新しい人間」たちの、超越的な「私」の支えなのだと思う。

#### 4. 「愛」の向こうの世界

「私」に固有の濃密な経験であり、同時に全体的なものへの回路を宿していること。これがシラーの「新しい人間」たちの愛の特徴であった。愛が個々の人間の生をより高次の全体性へと引き上げるというイメージは、彼の初期の哲学的断片『ユリウスの神智学』(1786)で打ち出された愛の観念とも致しており、それ自体は新プラトン主義やヘルメス主義という神秘主義的な思想を土壌にしているのだろう。<sup>20</sup>けれども『神智学』の中で、「愛」という「はしご」によって到達しうるより高次の全体性が、神的な境地としてあくまでも宗教的な次元でとらえられているのに対して、<sup>21</sup>劇作品に描かれた愛の世界に見て取れるのは、ただ宗教的な観念ばかりではない。確かにレイゼやポーザらが愛を介して帰属する「全体性」もまた、神の摂理と結びつけられているのだが、以下に見るとおり、そこには宗教的な問題のみではなく、現実社会のあり方に対する問題関心も強く込められているように思われる。

「新しい人間」たちの愛の世界には、二つの顕著な特徴を指摘することができる。まずひとつ目が、「平等」への志向性である。先に述べたように、彼らはその愛の情熱を支えにして、身分差の論理に絡めとられることのない「私」を主張していた。それだけではなく、彼らの愛が彼らにかいま見せている新しい世界もまた、平等な人間関係が紡がれる場として想起されている。身分違いの恋が許されない現状をはかなんだレイゼは、来世に思いをはせながらこう言う。「そのうち、お母さん、そのうち、身分のへだたの垣根がとれて、あのいやな階級の殻が飛び散って、

<sup>20</sup> シラーにおける愛の観念と同時代の思想史的背景との関わりについては、以下に詳しい。Schings 1980/81.

<sup>21</sup> Schiller, Friedrich: Theopophie des Julius. In: *Sämtliche Werke*. Bd.V. Hrsg. v. Peter-André Alt. München 2004, S.344-358, hier, S.353.

人間がみんなおなじ人間として通れたら そのときこそ私、純潔というものだけしか持っていないくても、(…) 私お金持ちになれるんだわ。そのときこそ涙が手柄みたいに、美しい考えが家柄みたいに評価されるのね。そうになったら、私の身分も高くなるのよ、お母さん。」(765) ここでは身分のころもを取り去った裸の個々人が「人間」という言葉で言い表され、愛の関係はそうした「人間」同士の水平な関係性として把握されている。ポーザが思い描く理想の国家もまた、基本的に平等な「人間」または「世界市民」たちの社会として構想されている。彼は王の存在を否定はしないが、王は「同胞の平等にとうとい権利のほかは、いかなる義務も市民を束縛することがないように」(127) 配慮すべきであると言う。テルもまた、「人の手で作ったものは、人の手で壊せる」(930) と、既成の秩序を土壌にして培われた差異を、こともなげに平らにならすような超越的な視点を持っている。彼の心が帰属している道徳性の世界もまた、「人間たち」がつむぐ平等な関係性への志向に貫かれているのである。

もうひとつ、彼らの愛の世界に特徴的なのは、そこで身分の差異が色あせるのと入れ替わりのようにして、別の差異化の秩序、すなわち市民的なジェンダーの秩序が重みを増している、ということである。これは「平等」の理念そのものと矛盾するように思われるかもしれないが、そもそも、差異をならし諸存在を水平なものとしてとらえようとする姿勢とは、かえって排他的な差異化の構図を呼び込みやすいものでもある。すなわちこの姿勢は、ときとして諸存在の均質性への要請に結びつく。そしてその結果として——これはナショナリズムの理論で指摘されていることだが——共同体の外部には均質性の実現を妨害する脅威としての他者像がかぶせられ、<sup>22</sup> また共同体の内部においては、「私たち」の均質性を担保するための何らかの秩序が、不可避的に強化されることになるのだ。シラーにおける「平等」の世界では、フェリペ二世や代言など既存の権力をふりかざしてこの理想を阻む「暴君」たちが、「脅威としての他者像」の役割を担っており、それゆえにその理想的世界像は、現実の歴史において展開する国民国家とはちがって、敵視の対象となる「外国」を想定しないまま純粹に普遍的なものとして保たれている。けれども平等な「私たち」の内部においては、やはり「私たち」に属していることを証するための何らかの手がかりが必要とされており、市民的なジェンダーの秩序に、この手がかりとしての機能がたくされているのだ。彼らの愛の世界は、まさに、若い娘の「純潔」が「富」として流通する世界なのである。そもそも啓蒙主義とは、世俗的、宗教的な権力者たちの目からではなく「人間」の目線から人間存在や人間関係をめぐる諸観念を再構築しようとする営みであったが、この「人間」の目線は、もっぱら「市民男性」のそれと重なりあっていた。そしてこの「市民男性」の目線から行われる人間関係の組み替えは、ジェンダー秩序の再構築を伴っており、この再構築に、シラー

<sup>22</sup> 大澤真幸『ナショナリズムの由来』講談社 2007年、376/377頁。

はその創作活動を通して積極的に参加していたのだった。しとやかで無垢で感受性豊かなルーイーゼの姿には、シラー自身が「女性の気高さ」<sup>23</sup> (1795) において謳い上げたような、市民男性の欲する理想的な女性像が、まさにそのまま具体化されている。またテルの愛の巢である家族も、危険な外の世界で身を削って働く父親と家を守り夫の帰りを待つ妻という、これもシラーの詩に端的に表現された市民的な性別役割の観念を、<sup>24</sup> 非常に図式的なかたちで投影させたものである。さらに『ドン・カルロス』でポーザの夢見る平等な人間たちの友愛の世界も、「同胞／兄弟」たちの世界として想起されており、あくまでも「男性」の目線から、「女性」という社会的位置に立った者の視点を慎重に排しつつ、構築されたものである。

厳密なジェンダー化を前提とした「平等」の社会、それは端的に言って、近代市民社会の原像にはほかならない。およそ共同体というものが何らかの差異化をめざす戦略を孕み持ち、この戦略に方向付けられながら展開するものだとすれば、封建社会から市民社会への変化は、差異の解消ではなく、差異化の戦略の母体となる観念や理念の転換としてとらえることができる。シラーの登場人物たちが愛によってかいま見ている理想的な全体、そこに個人が固有の感情主体として溶け込むことができる全体とは、「平等」への志向性と「ジェンダー」に刻印され、この二つに方向付けられながら差異化や秩序付けを行い、それによって自らを維持してゆく、近代的な市民社会こそを先取りしている。ポーザやルーイーゼにとっての理想的な「全体性」は、あくまでも漠然とした「大胆な夢」であり、ユートピアとしての体裁すら整っていない。けれどもそれは、当時すでに言説の中で培われた市民的な価値意識の中に胎動し、19世紀以降の国民国家において実体——それはもちろんシラーの「大胆な夢」とはまったく異なる風貌を備えているのだが——を与えられるだろう市民社会の核心的部分を、理想主義的なかたちで言い当てており、その意味で、たんなるユートピアにはない実現可能性を持っている。しかもこの実現可能性は、「新しい人間」たちが組み込まれている歴史的潮流のあわいに、すでにほの見えているのだ。だからこそ彼らの愛の世界は強い説得力を持ち、「私」の確かな支えとなつて、「私」の超然としたありようを可能にするのである。

## 結び

愛が個々人にアイデンティティを付与する役割を果たし始めたとき、愛そのものには何が求められることになったのか。「愛の近代化」の中で文化的な力を持ちうる「愛」とはいったいどの

<sup>23</sup> Schiller, Friedrich: Würde der Frauen. In: *Sämtliche Werke*. Bd.I, S.218.

<sup>24</sup> Ebd.: Das Lied von der Glocke.(1800) In: *Sämtliche Werke*. Bd.I, S.429. なおカンペによる以下の道徳書にも同種のジェンダー観が表現されており、これが同時代の市民的言説においてすでに広められていたことを示している。Campe, Joachim Heinrich: *Väterlicher Rath für meine Tochter. Ein Gegenstück zum Theophron. Der erwachsenern weiblichen Jugend gewidmet*. Braunschweig 1789, S.19.

ようなものだったのか。そうした問いの答えの一端を、シラーにおける「新しい人間」たちの描写から汲み取ることができるように思われる。「新しい人間」たちのありようが示していたのは、愛がなんらかの市民的イデオロギーと重ねるような文化的全体性につながりうるものとして存在しているとき、その愛は、アイデンティティの支えとして類いまれな威力を発揮させるということであった。

ただし、愛による主体化それ自体は決してシラーの劇作品の結末ではない。序に述べたように、シラーは常に、人間が複数の愛のはざまで葛藤するさまを描いた。そして『ドン・カルロス』に見られたように、この複数の愛のせめぎあいから浮かび上がってくるのは、なんらかの全体性と個人的な愛がどのようにつながりうるのか、あるいはつながりえないのかという問題である。そうした問題に焦点が当てられたのは、述べてきたようにこのつながりこそが、超越的な「私」の条件だからにほかならないだろう。複数の愛の葛藤を描いたシラーの悲劇には、このつながりの可能性を検証し、またそのあり方を基礎付けるための模索こそが明らかにされている。そしてこの模索においては、「愛の近代化」によりもたらされた困難が、レンツとはまったく異なるかたちで浮かび上がっているように思われる。つまり、レンツが愛によって主体化することの挫折を描いていたのに対して、シラーは、主体化した者の目のみ見えてくる矛盾と葛藤を、その悲劇において追究しているように思われるのだ。それを具体的に明らかにしてゆくのが、今後の課題である。



# Identitätsbildung durch Liebe

— Ein Versuch über Schillers Dramen —

SUGA Rie

Wie Niklas Luhmann in seinem Buch über die Entstehung der romantischen Liebesideologie darlegte, brachte der Modernisierungsprozess der westlichen Gesellschaft eine verstärkte Bedeutung der Liebe mit sich. Indem die funktionale Differenzierung der gesellschaftlichen Organe fortschritt, und für den einzelnen der herkömmliche soziale Status nicht mehr genug war, um die eigene Identität auszubilden und zu bewahren, gewann die persönliche Erfahrung der Liebe als wirksame Stütze des Selbst einen neuen kulturellen Rang, und zwar nicht nur in der Erfahrung der romantischen Liebe, sondern auch der familiären Liebe, der Freundschaft und der politischen Liebe wie z.B. der Vaterlandsliebe oder der kosmopolitischen Liebe zur Menschheit. In diesem Aufsatz wird versucht, die Darstellung und die Rolle der Liebe in einigen Dramen Schillers in Bezug auf ihre moderne gesellschaftliche wie individuelle Funktion zu interpretieren.

Luise Miller in *Kabale und Liebe*, der Marquis Posa in *Don Karlos* und die Hauptfigur von *Wilhelm Tell* sind sich trotz aller Unterschiede darin ähnlich, dass sie die innere Stärke haben, sich den tyrannischen Machthabern ohne jede Scheu gegenüberzustellen und ihnen ihre eigenen Auffassungen offen ins Gesicht zu sagen. Bemerkenswert ist die Tatsache, dass ihr standhaftes Selbst, das über die herkömmlichen Machtverhältnisse erhaben ist, sich vor allem auf ihre persönliche Erfahrung von Liebe stützt: Bei Luise geht es um die erotische Liebe zu Ferdinand, bei Posa um die leidenschaftliche Liebe zur Menschheit und bei Tell um die väterliche Liebe zu seiner Familie. Die Darstellung ihrer Liebe zeigt beispielhaft, wie diese der Verstärkung des Selbstbewusstseins und somit der Identitätsbildung der liebenden Personen dienen kann.

Es ist bei der Liebe der oben genannten Figuren charakteristisch, dass sie nicht nur die Vergrößerung und Vertiefung ihres emotionalen Erfahrungsbereichs ermöglicht, sondern ihnen auch einen Zugang zu utopischer Ganzheit eröffnet. Diese utopische Ganzheit enthält zwei Aspekte: Einerseits impliziert sie eine naturrechtliche Weltanschauung und wird mit einem Gesellschaftszustand verbunden, in dem die ständischen und sozialen Schranken wenn nicht aufgehoben, dann doch zumindest überwindbar sind. Andererseits ist diese Ganzheit auch von bürgerlichen Vorstellungen über den Geschlechtscharakter geprägt. Kurz gesagt nimmt die in den Dramen Schillers mit der Liebe gekoppelte Ganzheit den Kern des modernen Nationalstaates mit utopischen Tönen vorweg.

Im Unterschied zu den Dramen Schillers, in denen die Liebe mit ihrer Funktion für die moderne Gesellschaft vorbildlich gezeigt wird, stellen die Texte von J. M. R. Lenz wiederholt dar, wie der Versuch von Identitätsbildung durch Liebe scheitert, und zeigen, dass die intensive Erfahrung der Liebe nicht immer als eine Stütze des Selbst dienen kann. Die Darstellung der Liebe in den Dramen Schillers ist aber gerade deshalb bemerkenswert und wichtig, weil sich aus ihnen das zeitgenössische Verständnis der Voraussetzungen der gesellschaftlichen wie individuellen Funktionen der Liebe ableiten lässt.